

今週の為替相場見通し(2024年7月8日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		160.34 ~ 161.96	160.82	159.00 ~ 163.50
ユーロ	(ドル)		1.0710 ~ 1.0842	1.0835	1.0700 ~ 1.1000
(1ユーロ=)	(円)		172.49 ~ 174.50	174.25	172.50 ~ 177.50
英ポンド	(ドル)		1.2616 ~ 1.2817	1.2814	1.2600 ~ 1.2000
(1英ポンド=)	(円)	*	203.26 ~ 206.44	206.01	203.00 ~ 207.00
豪ドル	(ドル)		0.6634 ~ 0.6753	0.6748	0.6650 ~ 0.6800
(1豪ドル=)	(円)	*	107.24 ~ 108.60	108.49	107.00 ~ 109.10

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 為替営業第一チーム 南野 光喜

(1)今週の予想レンジ: 159.00 ~ 163.50 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

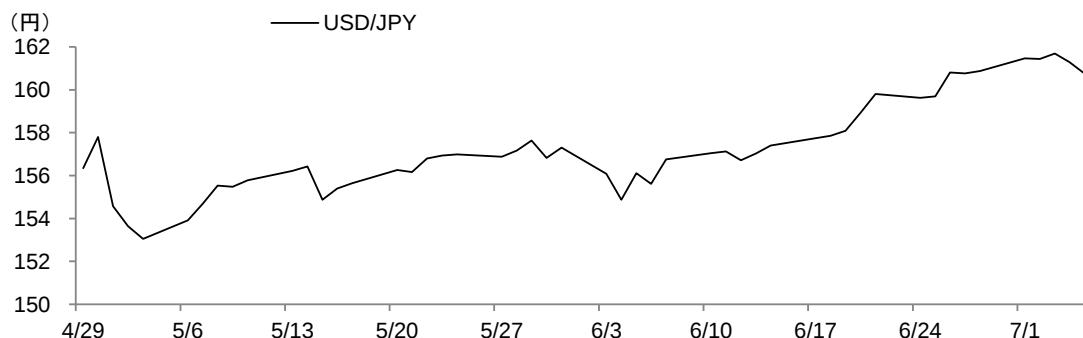
先週のドル/円は水準を切り上げる展開。週初1日、160.94円でオープンしたドル/円は、米金利が上昇する展開を横目にじり高推移。161円台まで上昇するも、米国時間に発表された米6月ISM製造業景況指数が予想を下回ると、市場は一転ドル売りで反応し、160.98円まで反落。その後は押し目買いが入り、161円台後半まで上値を伸ばした。2日、堅調な日本株の推移を横目にドル/円は161.74円まで上昇するも、その後は上値重く推移。米国時間になるとパウエルFRB議長の「ディスインフレ傾向に再開の兆し」等との発言が伝わると、米金利の低下に伴い161.28円まで下落。その後に発表された米5月JOLT求人件数が予想を上回るとドルが買い戻され、161.62円まで反発した。3日、東京時間は株高や米金利上昇の展開を横目にじり高で推移。米国時間に発表された米6月ISM非製造業景況指数が予想を下回ると、ドル売りが優勢の展開となり160.76円まで続落。その後発表された米6月FOMC議事要旨では、利下げを巡り慎重な姿勢が示されていた事を受け、161.75円まで買い戻された。4日、米国市場が休場の中、マーケットは閑散相場。欧州時間ではドル売り優勢の中、ポジション調整も入るとドル/円は一時160.95円まで下落。その後はやや値を戻し161円台前半での小動きの展開となった。5日、注目の米6月雇用統計の結果がやや冴えない結果となり、一時週安値160.34円まで下落。ドル売りの勢いは長くは続かず、押し目買いとなり161円台前半まで値を戻した。その後は再び160円台後半まで下落し、160.82円で越週した。

今週のドル/円は底堅い展開を予想する。足許のドル/円相場は、市場予想よりも弱い経済指標の結果を受けても下げ幅は限定的となる場面が続いており、底堅さが示されている。今週の注目材料である米6月CPIは前年比ベースで鈍化が見込まれているが、低下傾向にあった原油価格の再上昇を受けて、市場予想を上振れる可能性に注意したい。上振れた場合はドル買い圧力となり、高値をトライするだろう。9日(火)、10日(水)にはパウエルFRB議長が米議会上下両院で金融政策に関する半期に一度の証言を行う予定。先週にパウエルFRB議長は「労働市場は冷え込みつつある」と発言したが、米6月雇用統計の結果を受けて、利下げ時期等の踏み込んだ発言をするか内容に注目したい。一方で本邦サイドに目を向けると、円を買う材料は特段なく、本邦当局者は円安に対してけん制発言をするものの、実弾介入にはまだ距離があるとの見方が市場では優勢である。さらにトーンを強めた発言をしない限り、ドル買い円売りのトレンドは継続しそうだ。また、今週注目の経済指標は11日(木)米6月CPI、12日(金)7月ミシガン大学消費者マインドの発表が予定されている。

(3)先週までの相場の推移

先週(7/1~7/5)の値動き:

安値 160.34 円 高値 161.96 円 終値 160.82 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 為替営業第一チーム 尾身 友花

(1) 今週の予想レンジ: 1.0700 ~ 1.1000 172.50 ~ 177.50 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは、仏政局を巡る不透明感が一巡する中で、週半ばから後半にかけて上昇した。週初1日、1.0735でオープンしたユーロ/ドルは、仏下院選挙を巡る不透明感が後退し1.07台後半まで上伸後、独6月消費者物価指数(CPI、速報)の弱い結果や米金利上昇が重しになり、1.07台前半に上に往って来いとなった。2日、ユーロ/ドルは欧州株安に連れて週安値の1.0710まで下落後、米金利低下が支援材料となり1.07台半ばに反発した。3日、ユーロ/ドルは複数の米経済指標の軟調な結果を受けた米金利低下が好感され1.0817に上伸も、その後は米金利の上昇幅縮小が嫌気され、1.08を割り込んで引けた。4日、ユーロ/ドルは引き続き仏政治を巡る不透明感が後退する中、欧州株価の堅調推移や全般的なドル売りの流れが好感され、1.08台前半にじり高となった。週末5日のユーロ/ドルは、1.08台前半でのみ合い推移の中、週高値の1.0842を付け1.0835で越週した。

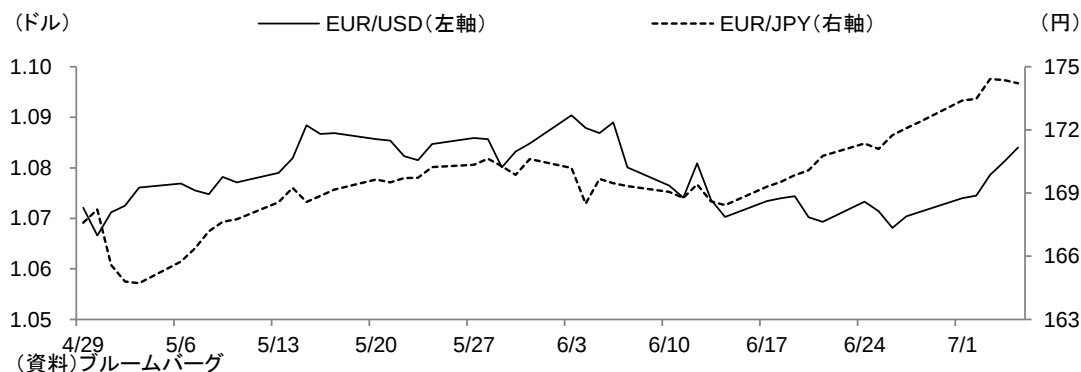
今週は、ユーロは対ドル・対円で堅調推移すると予想する。仏国民議会選挙の決選投票が終了し左派連合が予想外の勝利となりフランスの政局不安が再燃しており注意は必要だが、国民連合が過半数には届かなかったことや、先週発表された米経済指標が強弱まちまちの結果となったことで、足許ややドル売りが優勢となっていることから、ユーロが上昇しやすい環境が継続しそうだ。一方で、先週開催されたECBフォーラムにてラガルドECB総裁がユーロ圏のデフインフレについてかなり進んでいるとの認識を示しており、今後もECBによる段階的な政策金利の引き下げが見込まれている。また、先週発表された6月FOMC議事要旨では米国の利下げに対する慎重な姿勢が示され、高金利によるドル高基調も継続しそうなことから、対ドルについてはユーロの上値も限定的と考えており、節目である1.10程度が上昇の目途となるのではないかと予想している。対円でユーロは、ユーロ創設以来の高値を更新し続けており、円全面安の状況が暫く継続しそうな状況下、ユーロ/ドルの堅調推移も相俟って、更なるユーロ/円高値更新が見込まれそうだ。今週は、ユーロ圏では目ぼしい経済指標の発表は予定されておらず、経済指標の相場への影響は限定的となりそう。来週、17日(水)ユーロ圏6月CPI、18日(木)ユーロ圏7月政策ECB理事会を控えており、大きな経済イベントによる方向感の転換があるとなれば来週以降になりそうだ。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(7/1~7/5)の値動き:

(対ドル) 安値 1.0710 高値 1.0842 終値 1.0835

(対円) 安値 172.49 高値 174.50 終値 174.25



3. 英ポンド

欧州資金部 中島 将行

(1) 今週の予想レンジ: 1.2600 ~ 1.2000 203.00 ~ 207.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間の英ポンドは対ドルで反発。特に、7月5日に発表された米6月雇用統計では非農業部門雇用者数の伸びが減速、過去2か月分の伸びが下方修正されたほか、失業率上昇、平均時給の伸びが鈍化するなど、総じて弱い内容であり、米金利低下、ドル安で反応している。7月4日の英総選挙では、労働党が大勝。労働党の議席は412と過半数(326)を超え、2010年以来、14年ぶりの政権交代が実現した。事前予想通りの結果で市場の当初の反応は限定的だったものの、どちらかというポンドにはポジティブな内容だと見られる。14年に及ぶ保守党政権では特に後半にブレクジットやパーティーゲート(パンデミック最中にジョンソン元首相が自宅でパーティーを行ったとして批判され辞任した問題)や、トラスショックといった混乱が目立ったため、労働党の安定多数確保によって政治的安定が期待できるためだ。また、スコットランド選挙区での労働党の復権と、スコットランド国民党(SNP)の大幅議席減により、スコットランド独立の機運が再燃するリスクは低下したと見られる。

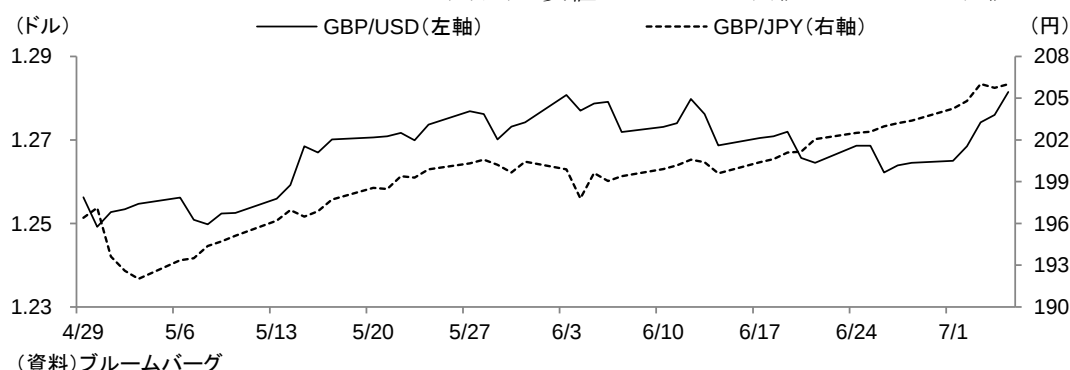
今週1週間は、フランスの政治情勢の不透明感からくる波及リスクに注意が必要だ。7月7日に行われたフランスの国民議会選挙は出口調査の段階で、左派・極左連合が最大議席という予想外の結果となっている。新人民戦線(NFP)は公共支出の大幅な増加、最低賃金の引き上げ、退職年齢の引き上げを公約に掲げており、財政懸念のほかインフレ圧力再燃の恐れも。左派政権となれば、過剰財政赤字手続き(EDP)を巡るEUとの対立が先鋭化するリスクも高まる。もっとも、フランスや大陸欧州の政治情勢の混乱と比較して、英国の政治は安定しているという見方が、対ユーロでのポンドをサポートするシナリオも考えられよう。英国の政治情勢については、内政では国民保険サービス(NHS)の待ち時間の解消や、不法移民対策、クリーンエネルギーへの移行加速といった公約の実現に向けた具体策が待たれる。外交では前保守党政権下で決定的に悪化したEUとの関係改善が焦点に。マーケットでは、財政が当面のところ最大の関心事となる見込みだ。

(3) 先週までの相場の推移

先週(7/1~7/5)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2616 高値 1.2817 終値 1.2814

(対円) 安値 203.26 高値 206.44 終値 206.01



4. 豪ドル

金融市場部 為替営業第二チーム 松永 裕司

(1) 今週の予想レンジ: 0.6650 ~ 0.6800 107.00 ~ 109.10 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは週を通じて上昇。週初1日、0.6674で取引開始すると、アジア時間は横ばい推移。米大統領選でのトランプ氏勝利への警戒からかNY時間にかけて米金利が上昇すると、豪ドルは売りが優勢に。米6月ISM製造業景況指数が予想を下回ると、豪ドルは一瞬0.6689まで上昇したがすぐに売り戻され全値戻し。その後も頭を押さえられて0.6660近辺で引けた。2日、前日からのドル買いの流れを背景に序盤は小安く推移。ECB主催の会合でパウエルFRB議長が米雇用市場について「適切に冷え込みつつある」との見解を示したとを受けて米金利が低下。豪ドルは買いが優勢となり0.6670まで上昇して引けた。3日、豪5月小売売上高が+0.6%増と市場予想の+0.3%を大きく上回ったことで買いが優勢に。NY時間に発表された新規失業保険申請件数が予想比悪化したことに加え、米6月ISM非製造業景況指数も予想を下回ると、ドル売りが強まり、豪ドルは今年1月以来の高値0.6733まで上昇。しかしその後はドルの買い戻しに押され、豪ドルは0.67近辺まで下落して引けた。4日、NY休場で薄商いの中、終日かけてじりじりと上昇し、0.6730近辺で引けた。5日、米6月雇用統計の公表を控えアジア時間は方向感なく推移。米6月雇用統計の結果は、非農業部門雇用者数の前月、前々月実績が下方修正されたほか、平均時給も市場予想通り鈍化し米金利は低下。豪ドルはじり高となり0.67台半ばで越週した。

今週の豪ドルは底堅動きを予想。先週の豪ドルは、堅調な豪経済指標の結果や株式市場の堅調推移、トランプ氏の大統領選優勢との見方などを材料に0.6700の抵抗線の上抜けに成功。対円でも年初来高値を更新するなど堅調な地合いが続く。今週は11日(木)に米6月消費者物価指数、12日(金)に米6月生産者物価指数が公表予定。先週の雇用統計では平均時給が前月比+0.3%と前月実績から鈍化するなど労働市場の需給緩和が意識される内容。今週の物価関連指標でも同様にインフレ鈍化が確認されれば、リスクセンチメントの改善とともに豪ドルが一層強含む可能性も。豪ドルは対円で2007年以来の高値圏で推移するが、米国の9月利下げへの期待の高まりからドル/円は161円を割り込んでおり、介入への警戒はやや後退していることから、対円でも引き続き底堅い展開を予想する。

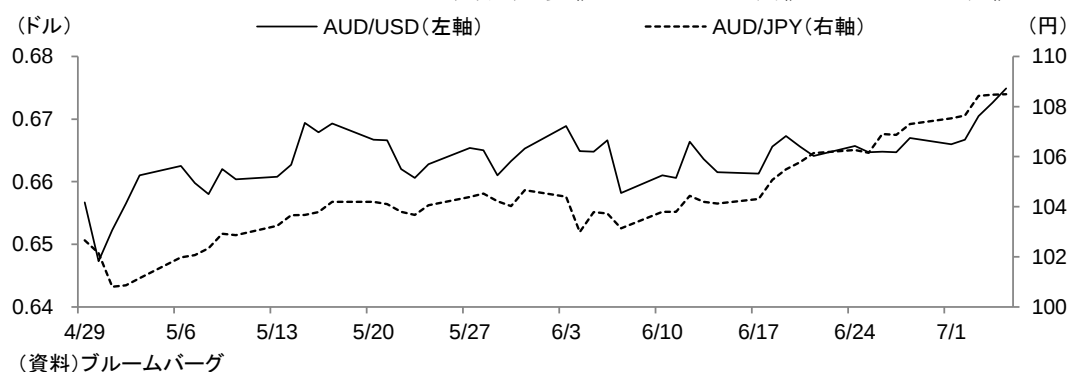
あ

(3) 先週末までの相場の推移

先週(7/1~7/5)の値動き:

(対ドル) 安値 0.6634 高値 0.6753 終値 0.6748

(対円) 安値 107.24 高値 108.60 終値 108.49



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。